巻頭言

「到達点」としての協同労働ではなく、「地層」としての協同労働を考えたい

田中 夏子（長野県高齢者生活協同組合副理事長／協同総研理事）

本来なら、この時期の『協同の発見』巻頭言は、労働者協同組合法施行から１年、続々と誕生する協同労働の息吹を、ともに喜び、励ましあう場になるのが適切と考えます。そのため、当初は、同法の法制化に多大な尽力をなさった方が執筆を予定されていましたが、ご体調を崩されたとのことで、筆者が急遽のお引き受けとなりました。下記のような事情から、時機を活かしきれない筆運びとなりますこと、まずは読者の皆さんにご理解をいただければ幸いです。

私たち、長野県高齢者生活協同組合（＝以下、長野高齢協）では、４月に大事な仲間、新井厚美さんを亡くしました。専務という要職・重責を担い、また、連合会や地域の仕事も快く意欲的にこなしながら、文字通り東奔西走する最中での急逝で、64歳という若さでの旅立でした。ご家族の皆さんのお悲しみを想うと胸がつぶれる思いです。そして共に組織を運営してきた私たちにとっても、今もなお、衝撃と精神的な混乱は持続しています。秋祭り用に事業所内に活動風景写真を貼り出しながら、新井さんがそこかしこに写りこんでいる様子を見て茫然としている就労組合員、ホワイトボードに残る新井さんの律儀な筆跡をいまだに消せないという就労組合員等、現場でも、ふとしたところで、悲しみの持続がうかがえます。

支えあって、暮らし、働く…このことが根底から揺さぶられました。そうした経緯から、私自身も、「協同労働」をめぐる文章や話は、とてもできる状況にありません。

＊　＊　＊

上記の事情から、「協同労働」にあえてひきつけず、仲間を亡くした後の私たちについて、書き留めておこうと考えます。まずは新井さんが当時、相当の力を砕いて準備してきた総代会を終了後、私たちは、前専務の職務をすべてリストアップするところから再スタートしました。残された資料や書類から、一つひとつ仕事を洗い出していくと、その数は93項目に上りました。以前から、常勤役職も現場も、かなりの長時間労働が常態化していましたが、この93項目がそのままでは、後任へのバトンはとても渡せないとのことで、役割分担の裾野を広げて、「できないことがあっても認め合う」を合言葉に、「無理」を分散しました。

しかし「分かちあう」「認め合う」とはいえ、いずれの就労組合員も、それま

でも目いっぱいのところに新たな職務と心労が増えることにかわりありません。そう簡単には「分担」が収まらず、たびたび紛糾し、話し合いがもたれました。

最終的には、ケアや地域づくり、配食の現場を支える組合員(就労組合員)と利用者を含む市民(地域の組合員)を思い浮かべて、なんとか活動の継続を…という切羽詰まった状況で、誰かが、無理を背負うという構造は、根本的には変わっていないのが現実です。

現在、労協法の要である「協同労働」が、これまでとは異なる質・量で、異なる考え方や実践に触れ、そこで新たな可能性を備えていく、そのような沸き立つ局面にあるのは間違いないと感じます。

他方で、「協同労働」の困難もまた膨らんでいきます。それはこれまでも様々な形で指摘されてきました。むしろ、悩みや疲弊、時には対立が蓄積されることも多く、だからこそ、「協同労働」の旗を、投げ出さずに、困難の都度、握りしめ直してきた…というのが実情と考えます。

例えば、協同組合や非営利組織では、従来共通理解、暗黙知とされてきた事柄も、多様な考え方、経験知を持つ新たな仲間を得ることによって、今まで曖昧にしていた「なぜ？」「根拠は？」の問いにむきあうこととなります。私は、この問いに向き合うことが、苦手です。なぜなら、その問いが時に本質的だからです。「私は」と書きましたが、それは、組織の苦手事項でもありました。

現在にあって、その問いを封じ込めないで、解き放っていくことが求められると感じます。こうした問いの中には、これまでの「暗黙知」にとって、「不都合」なものもけっこう含まれます。「不都合なものを捨象しての、狭い協同」ではなく、「不都合」なものと、対話できる、そうした組織文化をどうしたら作っていけるのか。亡くなった大切な仲間が残したメッセージはたくさんありますが、その一つが、この問いだと思います。

私たちは、優れた実践を前にして、到達点としての「協同労働」に着目しがちですが、そこに行きつくまでの、あるいはそこに行きつけずに悶々としている段階での、プロセス、言いかえると、わずかずつであれ積みあがっていく「地層」にこそ、目を凝らしたい…今はそんなふうに考えています。

＊　＊　＊

「協同労働」については、語らない、書かない…と決めていましたが、なぜ書けないのかを言い訳するうちに、どんどん「協同労働」に引き寄せられていきました。書かないけれど、考えてはいきたい…という気持ちの表れです。まわりまわって、「協同労働」に行きついてしまうのは、私の文章が混乱しているからという理由もありますが、「協同労働」は、働く現場への普遍的な問いを内包しているからでもあります。